バカと美少女と召喚獣!?

音無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと美少女と召喚獣！？

【Ｎコード】
Ｎ０３９１Ｕ

【作者名】
音無

【あらすじ】
バカテスの二次創作小説です。
主人公は天才少女。しかし、偶々体調を崩してＦクラスに…。
優しく可憐な少女とバカな少年たちの下剋上が今始まる！！………のかっ！？

主人公設定

名前

坂上　奈乃香

性別

女

見た目

ＩＳのシャルロット

性格

ふんわりした天然系で、恥ずかしがり

趣味

料理（激ウマ）と読書（最近は三國志にハマっているらしい）

備考

成績はＡクラスのトップで、得意科目は英語、数学、科学、生物、世界史、日本史。
それ以外はＢクラス並だが、それらの科目が８００程なので、総合科目は約５５００〜６０００と、霧島翔子すらも大きく上回る。
明久の家の近所に住んでおり、幼なじみである。
男女関係なくモテて、友好関係も豊富である。
腕輪の効果は『観察処分者並のコントロール力を得る』こと。

プロローグ

『試験召喚システム』――
科学とオカルトの偶然により完成されたそれは
テストの点数に応じた『召喚獣』を呼び出し戦うことのできる最先端システムである。

その召喚獣を用いたクラス単位の戦争――
それが『試召戦争』――試験召喚戦争である。

試験によりクラスがAクラス～Fクラスにまで振り分けられる。
振り分け基準は勿論テストの点数である。
頭が良ければAクラス，そこからB，C，D，Eと下がっていき、最も頭が悪ければFクラスとなる。

更に、このシステムが運営されている、この『文月学園』では、テストの上限がなく、クラスごとに設備が変わる。
Aクラスでは、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートなどの設備が整っており、全て学園側から支給される。
一方Fクラスはというと、机は卓袱台、椅子は座布団、チョークす

ら用意されていなく、蜘蛛の巣がはっていて、カビ臭い。

しかしそんな設備も『試験召喚戦争』により変えることができる。

下位のクラスは上位のクラスに勝てば施設を交換できる。逆に負けた場合は施設が一段階悪くなる。

今日はそんな学園のクラス分けテストの日…

「それではクラス振り分け試験始め！！」

教師の合図で全員がテストをめくる。

「（『三権分立』は『司法』『立法』ともうひとつは何で成り立つか…これなら簡単だ…二つまでは絞れる！！）」

ここに、試験に取り組む少年がいた。

彼は吉井明久という。

「（『憲法』か『漢方』のどっちかだったはず！！難しいと噂の試験だけどこの程度なら十問に一問は解ける！！二十点は堅いな…）」

彼はバカであった。

『ガタンッ！！』

突然明久の近くで誰かが倒れた。

「ひ、姫路さん！？それに坂上さんっ！？」

明久は席を立ち、二人に駆け寄る。

「吉井！！試験中だぞ、席につけッ！！」

「でも、二人が…」

「姫路、坂上…体調が悪いなら保健室に行くか？ただし試験中の退室は『無得点』扱いとなるがそれでいいかね？」

「ちょっ！！具合が悪くて退席するだけでそれは酷いじゃないですかっ！！」

『……た、退席します…』

二人の少女は退席した。

第一問（前書き）

今回は初回ということで長めです

第一問

私は今、学園への坂道を登っている。

「はぁ…。Ｆクラスだと分かっているだけに脚が重いなぁ…」

と呟いていると…

「おぉい、坂上さーんっ！！」

後ろから声がした。

「明くん？おはよ」

「うん、おはよう坂上さん」

「もぉ、幼なじみなんだから昔みたいに奈乃香って呼んで下さいよっ」

「で、でも恥ずかしいよ…」

「じゃなきゃ玲さんに今の明くんの生活伝えちゃいますよ？」

「すみませんでした奈乃香様っ！！」

変わり身早っ！！

「そういえば明くん、こないだは私のために先生に怒ってくれてありがと♪嬉しかったですよ（ニコッ）」

「う、うん…／／／」

と、話しているうちに学園に着いた。

「吉井、坂上、遅刻だぞ」

「あ、鉄じ…西村先生、おはようございます」

「おはようございます、西村先生。遅くなってすみませんでした…」

「あぁ、おはよう坂上、それと吉井、今『鉄人』って言わなかったか…？」

言いましたよ？　完全に言ってましたね♪

「ははっ気のせいですよ」

「ん、そうか？　まぁいい…ほら、受け取れ」

「あ、クラス分けの…どーもです」

「…ありがとうございます」

「坂上、残念だったな。体調さえ万全なら確実にAクラスの代表だったろうにな…」

「いえ、体調管理ができてなかったのが悪いですから…」

「そうか。あと吉井、俺はお前を去年一年見て『もしかすると吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑っていたんだ」

ゑっ！？違うんですかっ！？

「それは大いなる間違いですね、今に『節穴』ってあだ名にされますよ」

「あぁ、試験の結果を見て先生は自分の間違いに気がついたよ」

ま、まさか…っ!?

「そう言ってもらえると嬉しいです」

「喜べ吉井、お前への疑いはなくなった」

明くんがクラス分けの結果が書かれた紙が入った封筒を開けると…

『吉井明久、Ｆクラス』

ですよねっ♪

「…吉井、お前は大バカだ」

「はぁ…」

「明くん、元気出して下さいっ！！ね？」

「うん、それにしても、Ａクラスの設備凄かったね？」

「そうですねぇ…」

話しているうちにＦクラスに着いた。

「じゃあ私が先に入りますね？」

「うん」

『ガラガラ…』

「速く座れ！！このウジ虫野郎！！…って坂上…？」

「ふ…ふぇぇ～んっ、ウジ虫じゃないですぅっ」

『坂上さんを泣かせやがったっ！！殺せェーっ！！』

「ちょっ、待てっ！！ぐ、ぎゃあーーーーーっ！！！」

「なんか凄い声がしたけど奈乃香、大丈夫？って奈乃香っ！？何で泣いてるのっ！？」

「さ、坂本君がぁ…私のことウジ虫ってぇ…グスッ…」

「雄二殺すっ！！！」

明くんは坂本君の元へ走って行きました…。

「おぉ、明久っ！！良いところにっ！！助け…って何でカッターをっ！？ちょっ、止め…ギャァっ！！！」

ー10分後…ー

「ふぅ…酷い目に合ったぜ…」

「雄二が悪いんじゃん…ところで何で雄二が先生の代わりを？」

「あ、もしかして…」

私には察しがついた。
もしかすると私もなっていたかもしれないからね…。

「あぁ、俺がFクラスの代表だ」

あ、先生が来ましたね……。

「はい、席について下さい」少し老けてるけど優しい感じの先生だなぁ…。

「えーおはようございます、2年F組の担任の…」
黒板に名前を書こうとしたけどチョークがなかったみたい。

「福原慎です。よろしくお願いします。先ずは設備の確認をします。卓袱台、座布団…え－…不備があれば申し出て下さい。必要な物は極力自分で調達するようにして下さい」

「センセー俺の座布団、綿がほとんど入ってないですー」

「あーはい、我慢して下さい」

不備…申し出たのに？

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます」

「木工用ボンドが支給されますので自分で直して下さい」

「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど…」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

……教育機関としてどうかと思いますよ？

「では自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人から
お願いします」

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞ
い」

相変わらず女の子みたいで可愛いですね…。
周りの男子もうっとりしてますよ？

「……土屋康太」

康太くんの無口さも相変わらずですねぇ…。

そういえば女の子は居ないんですかねぇ…？

「ーーです。ドイツ育ちで日本語は読み書きが苦手です。」

わぁ、女子ですっ♪

「趣味は吉井明久を殴ることと坂上奈乃香を愛でることです♪」

『誰(ですか)っ!?』

明くんとハモりましたね…。

というか趣味がピンポイント過ぎですっ!

「はろはろ~、吉井、奈乃香、今年もよろしくね」

「なんだぁ、美波ちゃんでしたか…。びっくりしちゃいましたよ…。」

「っと、僕の番か…。コホン、えーっと吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァアーリィンっ!!!』

「だ、ダーリンっ♪……やっぱり恥ずかしいですぅっ//」

「失礼、忘れて下さい。あと奈乃香、最高だよ…グフッ…」

「あ、明くんっ!?何で吐血してるんですかっ!?」

『「ダーリンっ♪」キュルルルっ…「ダーリンっ♪」キュルルルっ…』

「康太くんっ！！いつの間に録音してたんですかっ！？というか何度も再生しないで下さいよっ！！／／／」

「……グッd（｀ー´）」

「……いや、グッじゃないですぅっ！！」

『も……萌えェーーーーーーっ！！』

「にゃふっ！？」

な、なんか驚きすぎて変な鳴き声出ちゃいました…。

「わ、私の番ですか…えと、坂上奈乃香です。仲良くして下さいっ！！」

『ガラガラ…』

「あの…遅れてすみま…せん」

『ゑ？』

現れたのは…学年3位の実力を持つ、姫路瑞希ちゃんだったのです。

「丁度、自己紹介している所なのであなたもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします…」

「はい、坂上さんと姫路さんに質問です！」

「な、なんでしょう？」

「はうっ！？私もですかっ！？」

「えーと…何でここにいるんですか？」

「確か姫路って最初のテストで学年3位だろ？しかもいつも一桁台じゃないか…？」

「坂上は常に学年トップだったよなっ！？」

「しかも超絶可愛い…」

「えと…あの…」

「わ、私たち、二人とも試験の最中に高熱を出してしまいまして…」

「あぁなるほど、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに…」

「あぁ化学だろ？あれは難しかった」

「俺は弟が事故にあったと聞いてそれどころじゃなくてな…」

「黙れ一人っ子♪」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくてさぁ」

「今年一番の大嘘をありがとう♪」

うわぁ…思った以上に酷いですね…。

と思っていると、私の近くの席に瑞希ちゃんが座る。

「はぁ…き、緊張しましたぁ…」

「あの、姫「姫路」」

「はっ、はい、なんでしょう？えーっと」

「坂本だ。坂本雄二」

「あ、姫路です」

「坂上もだが、体調は大丈夫なのか？」

「あっそれは僕も気になる！」

「私は今は大丈夫ですけど…瑞希ちゃんは？」

「吉井君？それに…な、奈乃香ちゃんっ！？」

なんでしょう？私の顔を見てやけに驚いてますけど…？

「一緒のクラスですよっ♪よろしくです♪」

「あっはい！／／／」

「姫路、明久がブサイクですまん」

「そんなことないですよ？」

「むしろそこそこ美形だと思うんですけど…」

「ふむ…まぁ悪くはないか…そういや明久に興味がある奴がいた気がするな…」

「だ、誰っ！？」

「確か久保ーー」

「あっ、知ってます！久保利光くんですねっ♪」

久保利光（性別／♂）

「…僕もうお婿に行けない…」

「げ、元気出して下さいっ！！きっと半分は冗談のはずですよっ！！だから大丈夫ですよっ！！」

「残りの半分はっ！？」

「……なぁ、明久、坂上ってさぁ……」

「うん、かなりの天然だよ……。今も実はとどめになってることに気づいてないよ…」

「そうか…。にしても、天然か…」

『天然萌えェーーーーーっ！！』

「はいはい、そこ、静かにしてくださいーー」

『ポンっ…ガラガラ』

福原先生が教卓を軽く叩くと、教卓は崩れ去ってしまいました…。

「えー…替えを用意して来ます」

「あはは…ケホっ」

「コホン、コホン…」

私と瑞希ちゃんは教卓が崩れて立った埃でむせてしまいました。

私も瑞希ちゃんもあまり身体は強くない方です。

すると、その様子を見ていた明くんと坂本君が何やらコソコソと話して廊下へ出ていきました。

しばらくして先生とほぼ同じタイミングで二人が帰ってきました。

……何を話していたんでしょうか？

「さて、あとは坂本君だけですね…。確かあなたはクラス代表でしたね。前へ来てください」

「了解！」

坂本君がやけに自信満々に前へ歩いていきます。
堂々としていてカッコイイですねっ♪

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたいーー」

第二問（前書き）

第二話です♪

第二問

「さて皆に一つ聞きたい――」

坂本君はクラスの設備を一通り眺めて言葉を続けます。

「Aクラスは冷房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが
……」

キリっとした表情になり、言い放ちました。

「不満はないか？」

『大アリじゃあッ！！！』

クラス中のほぼ全員が叫びました。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

「いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだっ！！」

「Aクラスだって同じ学費だろっ！？改善を要求する！！」

「そこで代表としての提案だが――、FクラスはAクラスに対して『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

『シ～ン……』

一瞬の静寂。
坂本君の言ったことに対して頭がついていかなかったのですかね？

「そ、そんなの勝てるわけがないだろ？」

「これ以上設備を落とされたらどうなるんだ？」

「姫路さんがいたら何もいらない」

「俺は坂上さんがいたら何でも良い」

…………最後二つのラブコールは誰でしょう？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

『ザワザワ…』

「無理に決まってるじゃん」

「そう言われても、何の根拠もないしなぁ…」

普通ならそう考えますよね。私だって皆さんの立場ならきっとそう考えています。でもーー

「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

このクラスなら、不可能も可能にできそうですから。

「それを今から説明してやる。おい康太、いつまで姫路と坂上のスカートを覗いているんだ」

「………！！（フルフル）」

「はっ、はわっ！？」

「きゃっ…！！……もぉ、康太君のえっち……」

『ブシャアーーーーーっ！！！』

何故か私の一言でクラス中が鼻血に染まります…。

「土屋康太。こいつがあの有名な、ムッツリーニだ！」

坂本君…、鼻血ダラダラでそんなドヤ顔されても…。

「馬鹿な…奴がそうだというのか？」

「（ブンブンっ…！！）」

「見ろ！まだ証拠を隠そうとしているぞ…」

「あぁ、ムッツリーニの名に恥じない姿だ…」

恥じてくださいよ…。

そして鼻血を止めてください…。

「姫路と坂上については皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？　わ、私ですか？」

「が、がんばります…」

「ああ、ウチの（色んな意味で）主戦力だ。（色んな意味で）期待している」

……何故か裏の声が聞こえた気がします…。

「彼女たちならAクラスにも引けをとらない！」

「あぁ、彼女たちさえいればもう何もいらないな」

ホントに誰でしょう、さっきから私たちに熱烈なラブコールを送っているのは…？

「それに、木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

「演劇部のホープ！」

「あぁ、アイツ確か双子の姉が…」

「Aクラスの木下優子だっけ？」

「勿論、俺も全力を尽くす」

「確かになんかやってくれそうな奴だな」

「坂本って確か小学生のころ、『神童』って呼ばれてなかったか？」

「じゃあ試験は姫路さんや坂上さんと同じで体調不良だったのか？」

「おいおい、実力はAクラスレベルが三人もいるのかよ！！」

「これはいけるんじゃないか！？」

「よし、やってやろうじゃねーか!!」

クラスの士気は最高潮に。

しかしーー

「それに吉井明久だっている」

『シ～ン……』

いきなり静かになりました…。

「誰だよ吉井明久って?」

「それ以前にこのクラスにいたか?」

あらあら、存在すら忘れられてますね…。

「ホラ!せっかく上がった士気が台無しじゃないか!!だいたい僕は普通の人なんだから普通の扱いをーー」

『ギロッ…』

「って、雄二は何で僕を睨むのかな？」

「そうか…、知らないのなら教えてやる。コイツの肩書きは……『観察処分者』だっ！！」

『ドーンっ！！……』

と、効果音がなった気がしたのは気のせいですかね？

ーー続く…

第三問（前書き）

第三話です…（゜∇゜;）

第三問

「知らないのなら教えてやる。コイツの肩書きは……『観察処分者』だっ！！」

「……それってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

はい、正解ですよ♪

「ち、違うよ！！ちょっとお茶目な十六歳の愛称で…」

「そうだ。バカの代名詞だ！」

「肯定するな、バカ雄二！」

だって事実ですもの…。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

「それって凄いですね！試験召喚獣って見た目と違って力持ちらしいですし（キラキラ…）」

瑞希ちゃんが輝いた瞳で明くんを見つめます。

「あはは、そんなに大したもんじゃないよ。確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど…」

『まぁ明くん（明久）の点数なんて、有って無いようなものですからね（だからな）…』

「……二人とも、酷くない？」

ふぇ？私何か酷いこと言いましたかね？

（※言いました）

「…まぁ、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。みんなと同じで教師の監視下でしか呼び出せないし、僕にメリットもないしね」

「おいおい…じゃあ召喚獣がやられたら本人も相当苦しいって事だろ？」

「だよな…。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるって事じゃん」

『ザワザワ…』

「気にするな！いてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローするところだよね？」

「そうですよ坂本君！」

「ありがとう。僕の仲間は奈乃香だけだよ…」

「幾ら明くんが学年一の雑魚で役立たずだからって、それは言い過ぎですよ？」

「グハァ…」

あれ？明くんがさっきよりさらに傷ついてませんかっ！？

「明久……なんか…すまん……」

坂本君！？何で私を横目で見ながら明くんに合掌してるんですかっ！？

「とにかくだ！俺たちの力の証明としてまずはＤクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だーっ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おぉーっ！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムデスクだっ！！」

『うおぉーーーーーーっ！！！』

「お、おーっ！！」

みんなの雰囲気に乗せられて瑞希ちゃんも声をあげます。

「明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事に大役を果たせ！」

……あれ？

「…ねぇ雄二。下位勢力の使者って大抵酷い目に遭うよね？」

ですよね…？
何で明くんなんでしょうか…？

「大丈夫だ。騙されたと思って行ってみろ」

騙され……あぁなるほど。そういうことですか♪

「本当に？」

「勿論だ。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「分かったよ。それなら使者は僕がやるよ」

……何故か二人の間にピンク色の雰囲気が…？

「がんばれよ！」

「頼んだぞ！」

クラス中に見送られ教室を出ていく明くん。

ーー数分後…

「騙されたぁっ！！こ、殺されるところだった！！アイツら物凄い剣幕で掴みかかってきたぞ！！」

『やっぱりそうきたか（きましたか）…』

なんだか坂本君とはよくハモりますね…？

「吉井くん、大丈夫ですか？」

「あっうん。大丈夫。ほとんどかすり傷だし」

「吉井。本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

瑞希ちゃんや美波ちゃんに心配されて嬉しそうな明くんです。が、

「良かった…まだウチが殴る余地はあるんだ……」

美波ちゃんがグッと拳を握りしめ言いました（笑）

「あぁ！もうダメ！死にそう！」

「そんなことより今からミーティングを行うぞ」

坂本君が教室を出ながら私たちに声をかけます。

（……サスサス）

「ムッツリーニ、畳の跡なら消えてるよ？」

「……！！（ブンブン！）」

「いや、今更否定されてもバレてるよ？」

「……！！（ブンっ！！ブンっ！！）」

「ムッツリーニがHなのもよく知っているから」

「……！！（ブンブンブンブン！！）」

「……何色だった？」

「水色と、白とピンクの縞パン……」

『な、何ぃっ！！縞パンだとぉーーーーーっ！！？ど、どっちがだっ！？』

「……坂上」

「い、言わないでっ！　皆のえっち！／／／」

『ブッシャァァァーーーーーーっ！！！』

鼻血が……噴水のように…。
康太君やクラスの皆だけじゃなくて、明くんや坂本君、秀吉君まで鼻血に染まってます…。

うぅ…私の今日のパンツ、皆に知られちゃいました…。

第三問（後書き）

もう一つの方の小説を進めているとなかなかこっちが進まなくて…

（－ｏ－；）

でもがんばりますよ！！

応援メッセージや感想、アドバイスなどお待ちしてますね♪

第四問（前書き）

【第一問】

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希と坂上奈乃香の答え

『問題点・・・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例・・・・・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと坂上さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

第四問

「さて、明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応、今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思うなら、パンでもおごって欲しいんだけど」

「えっ？吉井君って、お昼食べない人なんですか？」

坂本君や明くんの会話を聞いた瑞希ちゃんが驚いて質問します。

「いや…。一応食べてるよ」

「明くん…、あれは食べてるって言えるの？」

「坂上の言う通りだぞ、明久」

「な、何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って……」

「水と塩ですよね？」

「失礼な！！僕をバカにするにも程があるよ！きちんと砂糖も食べてるよ！」

「そ、それは食べてるとは言いませんよ…」

「『舐める』が正解じゃろうな」

『……』

皆が憐れんだ……ゲフンゲフン、温かい目で明くんを見つめます。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

全くもって坂本君の言う通りですね…。

「し、仕送りが少ないんだよ！」

はぁ…。仕方ないですねぇ。

『良かったら私がお弁当作ってきましょうか？』

「ゑ？」

「あ、瑞希ちゃんが作ってくるなら私は良いですね」

「そ、そんな！せっかくの奈乃香のプロ級の手料理が！」

「なんじゃ？奈乃香は料理が上手いのかの？」

「初耳だな…」

まぁ、言ってませんでしたから…。

「だったら私は皆さんに作ってきましょうか？」

「い、良いのか！？」

「はい♪どうせ材料ならたくさんありますし、明くんの分はいらないみたいですけど」

「それは嬉しいのぅ♪」

「……女子の手料理…。」

「お手並み拝見ね」

「そ、そんなぁ～…」

「だ、大丈夫です！吉井君には私が作ってきますから！」

「ありがとう！姫路さんって優しいね」

「えッ！？そッそんな……／／／」

顔を赤らめて瑞希ちゃんが照れてます。

「今だから言うけど僕……初めて会う前から君のこと好きーー」

「おい明久、今振られると弁当の話はなかったことになるぞ？」

「ーーにしたいと思ってました！」

「……（スス…）」

「ちょっ！奈乃香！何でさりげなく僕から遠ざかるの！？」

「べ、別にいきなり性欲をぶちまけた明くんにドン引きなんてしてませんよ？はい、ド変態なんて思ってませんから！」

「し、しまったァーーッ！！女子にドン引きされたァーーっ！！」

ついでに言いますと、初めて会う前からって何ですか…。

会う前から好きってどんな預言者ですか…？

「さて、話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

「雄二、一つ気になっていたんじゃが、どうしてAでもEでもなくDクラスなんじゃ？」

「そういえばそうね」

「当然、考えがあってのことだ」

「どんな考えなんですか？」

「色々と理由はあるんだが、Eクラスを攻めない理由は戦うまでもない相手だからな」

「え？でも僕らよりクラスが上だよ？」

「試験の時点では向こうが強かったかもしれんが、実際は違う。オマエの周りの面子をよく見てみろ」

坂本君がそう言うと明くんが私たちを見回しました。

「えーっと…。美少女が3人と馬鹿が2人とムッツリが1人いるね」

「俺が美少女だと!?」

……へ?

「…………ポッ」

……はい?

「吉井ったら正直ね」

「えぇっ!?君たちが美少女に反応するの!?どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない!!」

「皆、落ち着いて下さいよ…。美少女は瑞希ちゃんと美波ちゃんと秀吉君に決まって……ってことは私は…?明くんよりバカじゃないから……ムッツリ!?酷いですっ!!」

「なんでそうなるのっ!?」

「そうじゃ！　わしは男じゃ！　美少女にはわしではなく、奈乃香じゃろ！」

「ま、要するに、姫路と坂上に問題ない今、正攻法でもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスとの戦争は無駄ってことだ」

「じゃあDクラスに正攻法は厳しいの？」

「確実に勝てるとは言えないな」

「だったら最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろう？　それにさっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なことだしな」

「さっき言いかけた…？　そんなこと言ってましたっけ？」

「あぁ、それはさっき教室を抜けたとき、明久に姫路と坂上のためにってーー」

「ヴァーヴァーっ！！それはそうと！！『さっきの話』、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ！お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか、お前ら。……ウチのクラスは……」

坂本君はニカッと笑い、

「最強だっ！！」

こう断言したのです。

「いいわね、面白そうじゃない！」

「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「…………（ぐっ）」

「が、頑張りますっ！」

「勿論私も協力しますね♪」

「…そうか。それじゃ作戦を説明しようーー」

こうしてーー

私たちFクラスは、Dクラスとの試召戦争に向けて作戦会議を始めたのでした……。

第四問（後書き）

今回バカテストを入れました。

というか、今まで忘れてました……。

二、三回に一度は入れようと思いますので…。

第五問（前書き）

【第二問】

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（1）弦法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿が木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弦法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

坂上奈乃香の答え

『（1）河童の川流れ』

『（2）踏んだり蹴ったり（明くんに攻撃する美波ちゃんと坂本君の様子）』

教師のコメント

彼らは鬼なんですね…。
吉井君があわれです…。

坂上奈乃香の返答

いえ、自業自得でした♪

教師のコメント

まさかの展開に驚きを隠せませんね…。

第五問

「先生、次お願いします！」

「は、はいっ！」

今はDクラス戦が始まり少したったあたりです。

私と瑞希ちゃんは、振り分け試験で途中退室のため点数が無いため、補給試験を受けています。途中で変な放送が入ったのは聞かなかったことにしました。

「先生！」

「私もお願いします！」

「は、はい…」

瑞希ちゃんもかなりハイペースですが、私はその2〜3倍程のスピードで問題を解いていきます。

「次お願いします！」

総合科目を補給していて、今のところ合計４２００点くらいでしょうか。得意科目は恐らく全て４００点超えしているでしょう。

「そろそろで良いです」

「わ、私もとりあえずこれで…」

「分かりました…。姫路さんは３４２７点、坂上さんは４３５９点ですね。それぞれの教科の点数は各自これを見て確認してください」

採点の詳細が書かれた紙を渡されます。

時間が無かったため、私も瑞希ちゃんも点数は低めですが、Ｄクラスには十分に太刀打ちできる点数です。

「では瑞希ちゃん。そろそろ救援に行きましょう！」

「はい！」

私たちは戦場に急ぎます。

「Dクラス代表の平賀だ！！」

「遂に敵の本陣が動き出したのか！」

「チャンス！向井先生！Fクラス吉井が…「Dクラス玉野美紀、サモン――」なっ！近衛部隊！？」

「残念だったな船越先生の彼氏クン「違うよ！」――ま、近衛部隊が居なくてもお前じゃ無理だろうけどな」

「確かに、僕じゃ無理だろうね――」

ニヤリと笑い…

「だから姫路さん、奈乃香、任せたよ」

「どうもです」

「あ、あの…」

「え？あ、姫路さんに坂上さん。どうしたの？Aクラスはこっちは通らなかったと思うけど…」

「いや、そうじゃなくて…」

平賀くん、混乱してるというか、状況が分かってないんですね…。

「とりあえず…。木内先生、Ｆクラス坂上奈乃香がここに残っているＤクラス全員に数学勝負を申し込みます」

「あ、同じく姫路瑞希もです」

『サモン！』

大剣に西洋風の鎧の瑞希ちゃんの召喚獣と、三國志に出てくる関羽の青龍偃月刀を構えた軽装の私の召喚獣。
点数が表示される。

Ｆクラス坂上奈乃香＆姫路瑞希ＶＳＤクラス１３人

数学５６９点＆３３２点ＶＳ平均１３０点×１３

『な、何ぃ――っ！！？』

「えと、……ごめんなさい♪」

「すみません…」

『斬っ！！』

瑞希ちゃんの召喚獣がＤクラス代表の平賀くんの召喚獣を、私の召喚獣がそれ以外の召喚獣を一撃で真っ二つにしました。

「——勝者、Ｆクラスっ！！」

うぉぉぉっと歓声が上がります。

「凄ぇよ！！本当にＤクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台からも解放されるぜ！！」

「そ、そんな…バカな…」

へなへなと腰を抜かす平賀くん。なんだか悪いことをしちゃったみたいですね。

「やっぱり坂本は凄い奴だったんだな！！」

「坂本万歳！！」

「姫路さん愛してます！」

「坂上さんは俺の嫁！」

「いや、俺の嫁だ！」

「……俺の被写体…」

『それだっ！！』

……違います。というかさっきの康太君でしたか…？

「あー、まぁなんだ、そう褒められるとなんつーか…」

「坂本君たら、照れちゃってカワイイですね♪」

「えっ！？いや、その…」

「坂本！！握手してくれ！」

「俺も！」

「じゃあ私もです、雄二くん♪」

「坂上、お前名前で…」

「だって明くんや秀吉くん、康太君たちは名前で呼んでるのに、雄二くんだけ坂本君のままでしたから。ダメ…ですか？」

上目遣いで雄二くんを見ます。雄二くんは背が高いので自然にそうなります。

「あ…いや、構わないが…／／／」

「じゃあ私のことも奈乃香で良いです♪」

「わ、分かった、な…奈乃香」

「はいっ♪」

ニッコリ笑って握手をしました。雄二くんの顔が少し赤かったのは気のせいでしょうか？

「雄二！僕とも握手を――」「ふんっ！！」ぐあっ！」

『カランカラン…』

明くんが差し出した手を雄二くんが握り、捻ると袖から包丁が落ちました…。

「…明くん？」

「おーい、誰かペンチ持ってきてくれ――」「す、ストップ！僕が悪かった！」…ちっ」

雄二くんはいったいペンチで何をしようと――

「生爪…」

――何も聞かなかったことにしましょうか…。

「そうでした！　Ｄクラスとの交渉を…」

「ん？　あぁ、そうだったな！　おい、Ｄクラス！」

「…分かってる。ルール通りクラスを明け渡すよ。ただ今日はもう遅いから作業は明日でいいか？」

「勿論作業くらいは明日で良いよね？」

明くんが雄二くんに聞きます。が、

「そんな必要はないぞ？」

「え？」

「Ｄクラスを奪う気はないからな」

「ち、ちょっと待ってよ雄二！せっかく普通の設備が手に入るんだよ！？」

「明くん、私たちの目標はＡクラスですよ？もしもここでクラス設備を交換したりしたら、後々Ａクラスとの試召戦争に反対の意やＤクラス設備に満足の声が出て士気に影響するんですよ」

「ふ、ふ〜ん…」

絶対分かってませんね…。

「とにかくだ、こちらの条件を飲むなら設備の交換は無しにしても構わないが、どうする？」

「そりゃありがたいけど…条件はなんだ？」

「簡単だ。Ｂクラスの室外機を壊して欲しい。教師に目をつけられるかもしれないが、それで設備を守れるなら構わんだろ？」

「…分かった。その条件、呑もう」

「交渉成立だな」

「雄二くん、次はＢクラスにするんですか？」

「あぁ、まぁな。次も期待してるぞ、奈乃香」

「はいっ♪」

「さぁ皆！明日は点数の補給テストを行うから今日はゆっくり休んでくれ！解散！」

皆さんがぞろぞろと帰って行きます。

「じゃあ奈乃香、雄二。僕らも帰ろうか」

「はい♪」

「そうだな」

「あ、あの、坂本君！」

瑞希ちゃんが雄二くんに話しかけてきます。

「どうした姫路？」

「あの、実は坂本君に聞きたいことがあるんです」

「おう、分かった。すまんが奈乃香、ちょっと待っててくれるか？」

「良いですよ」

「…なんで僕には何も無いのさ。というか姫路さん、あんなに熱心に雄二と（ブツブツ…）」

何だか明くんの目が怨みと妬みで染まって…だんだんやらしい目に変わってきましたね…。

「明くん、まさか今なら瑞希ちゃんのパンツを見るチャンス――なんて考えてませんよね♪」

「へっ!?あ、当たり前じゃないか！（ダラダラ…）」

汗だくになってますけど。……明くんのえっち！

「――たぶん姫路の想像は間違ってないと思うぞ」

「あ、雄二くん。もう話は済みましたか？」

「ああ、待たせてすまんな。帰ろうぜ……って、明久は何をしてるんだ？」

「さ、さぁ…？何やら自分の雑念を払うとか言って、壁に頭をぶつけてるみたいです…」

「…ホント救いようの無い馬鹿だな」

「幼なじみとしても流石に恥ずかしいです…」

「ん？あ、雄二、もう話はいいの？」

「…あぁ」

「な、何？二人ともそんな憐れんだ目で僕を見て…」

「な、何でも無いですよ？ねぇ？」

「あ、あぁ…。何でも無いさ…。多分な」

「そう？なら良いんだけど。じゃ、帰ろっか」

『…………はぁ…』

私たちのため息が重なりましたが、明くんは何にも気がつきませんでした…。

「そういえば明くん、さっきの戦争でちらっと見たんですけど、あの点数は酷すぎですよ？」

「そうなのか？明久、ゲームばっかじゃなくて少しは勉強もしろよ？」

「分かってるよ…って、教科書忘れて来ちゃった」

「アホ…俺は先に帰ってるぞ」

「私も先に帰りますね。時間も時間ですし…」

「なら家まで送るぞ」

「雄二くん、ありがとうです♪」

「あ、あぁ…／／／」

「じゃ、二人ともまた明日ね！」

「あっ！」

「どうした、奈乃香？」

「そういえば明日はお弁当作らないといけないんでした！スーパーに寄って帰るんで雄二くんは先に帰って良いですよ？」

「…お前なぁ、この時間に女一人じゃ危ないから送ってんのに荷物増やして一人で帰るって…」

「あ…」

「買い物も付き合ってやるから」

「すみません、お礼に明日は雄二くんの好きな物作りますね？」

「サンキュ。それじゃ——」

私たちは買い物をして帰りました。

雄二くんはさりげなく荷物を持ってくれて、しっかり家まで送ってくれました。

ありがとう、雄二くん♪

第五問（後書き）

今回は雄二との好感度が上がりました。

一応、明久、雄二、秀吉、優子は攻略する予定です。
場合によっては翔子も。

他にこの中で奈乃香とくっつけて欲しい子がいれば教えてください。

?ムッツリーニ

?須川くん

?工藤愛子

?清水美春

?小山友香

?その他（キャラ名の記入をお願いします）

…………選択肢を良く良く見たら女子率高ッ！？

まぁいいか…（笑）

感想お待ちしてます！

第六問（前書き）

今回はセリフ多めです。

第六問

Ｄクラス戦が終わった翌日――

『ガラガラ…』

「おはよ～」

遅刻ギリギリの時間に明くんが登校してきました。

「おう明久、時間ギリギリだな」

「明くんおはようです。いつもながら遅かったですね？」

「ああ、雄二、奈乃香。おはよう。皆には何も言われなかった？」

「何がですか？」

「Ｄクラス設備のこと」

「ああ、ちゃんと説明したからな。問題ない」

「それより明くん、昨日の始末は良いんですか？」

「ああ、生爪を剥がされてまでする事じゃないし、もういいよ」

「いえ、雄二君の始末じゃなくて、聞いたところによると――」

と私が言いかけたとき、

「吉井ッ！！」

『ドゴッ！！』

「ごぶぁっ！！」

明くんが美波ちゃんに蹴り飛ばされました。

「し、島田さん…おはよう…」

「おはようじゃないわよッ！！」

美波ちゃんものすごく怒ってます…。

「アンタ、昨日私を見捨てただけじゃなく、器物破損の罪までかぶせたわね……！」

そうなんです。私も後から聞いたのですが、なんでも明くん、美波ちゃんを見捨てて、その後窓ガラスを割った罪をかぶせたらしいんです。

「おかげで彼女にしたくないランキングが上がったじゃない！！」

えっ！？怒るとこはそこですか！？

「み、美波ちゃん…、彼女にしたくないランキングなんて気にしなくても…」

「…毎回彼女にしたいランキング上位十位以内に入ってる奈乃香に言われても傷が深まるだけよ……」

「……ごめんなさい」

実は今回は三位でした…。
ちなみに一位が瑞希ちゃんで二位が霧島翔子ちゃん、三位が私で四位が木下優子ちゃん、五位が秀吉くんでした…。

「ま、本来なら掴みかかってるところだけど」

蹴りはしましたけど。

「アンタにはもう十分罰が与えられてるようだし許してあげる」

「うん…さっきから鼻血が止まらないんだ…」

「いや、そうじゃなくてね、一時間目の数学のテストだけど、監督の先生、船越先生だって！」

な、なんという…。
明くんは昨日、雄二君の策略で、船越先生に……。
これは流石に可哀想ですね…。助けてあげますか。

「（明くん明くん！）」

「え？何、奈乃香？」

「（しっ！声が大きいです！船越先生から助けてあげますから、美波ちゃんに気づかれないように静かに私の話を聞いてください）」

「（わ、わかったよ…。で、どうすれば良いの？）」

「（とりあえず近所のお兄さんで独身の３９歳のお兄さんいましたよね？）」

「（うん。で、それがどうしたの？）」

「（その人を船越先生に紹介してあげればいいんですよ！）」

「（そうか！なるほど、ありがとう奈乃香。奈乃香は優しいね）」

「（まぁ幼なじみなので）」

とりあえずこれで明くんの死亡フラグ（？）は回避ですね。

…………………………………………

「ん……はぁ」

テストが四教科終わり、大きく伸びをします。

「疲れたぁ…」

「うむ、疲れたのぅ」

「あ、秀吉くんポニーテールですね、可愛いです♪」

「奈乃香は今日もポニーテールじゃな。お揃いじゃ♪」

「はいっ♪」

「よしッ昼飯食いに行くか！」

「あッウチも一緒していい？」

「じゃ僕は贅沢にソルトウォーターでも…」

あ、皆が行っちゃう前に言わないと……！

「あ、あの！えっと…お昼なんですけど、約束通り作ってきたんで食べてくれませんか？」

「お、ホントか奈乃香？サンキュ」

「それは楽しみなのじゃ！」

「やった！久しぶりに塩と水以外の物が……しかも奈乃香の手料理なんて……！」

「あ、あの、吉井君の分は私が作って来たんですけど…」

「私は明くんの分は作ってないですよ？」

「えっ？そうなの…？じゃあ姫路さん、ありがたくいただくよ」

「は、はい！」

「む――ッ、瑞希って意外と積極的なのね…」

「そうじゃ！せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」

「だったらお前らは先に行っててくれ。俺はジュースでも買ってくる。昨日の礼も兼ねてな！」

「あっ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ！」

雄二君と美波ちゃんは自販機に寄ってからくるみたいですね。

「ちゃんと俺たちの分も残しておいてくれよ」

「大丈夫ですよ！たくさん作りましたから！」

「じゃ、僕らも行こうか」

「そうじゃな」

…………………………

「天気が良くて良かったのぅ」

「そうですね」

そう言いつつ準備をします。

「じゃあ、秀吉くん、康太くんは私のをどうぞ」

「おぉ！これは豪勢じゃな！香りも見た目も良いのぅ」

「…………豪華」

「吉井君には私のを…」

「おぉ！凄いよ！塩と砂糖以外の物が入ってるよ！」

「とりあえず食べてみるかの。いただくのじゃ…（パクっ）」

「…………（パク）」

「二人とも、どうですか？」

「うむ、とても美味いのじゃ！奈乃香は良い腕をしておるな。良いお嫁さんになりそうじゃ」

「…………美味」

「良かったです♪どんどん食べて下さいね？まだまだありますから」

「うむ！」

「…………（コクッ）」

「じゃあ僕もいただくね、姫路さん」

「は、はい、どうぞ！」

「とりあえずこの美味しそうなエビフライを——（パクっ）…………」

『バタン』

「え？」

「あ、明久！？」

「う…うーん……」

「あ、目が覚めました！」

「吉井君、大丈夫ですか？」

「えっ！？あ、う、うん！」

「(明久、今のは……）」

「（…………姫路の料理）」

「（なんか凄いよアレ！ヤバイよ！）」

「……瑞希ちゃん、私も一つ……卵焼きを貰って良いですか？」

「あ、はい！どうぞ」

『奈乃香ッ！？』

「いただきます……（パク）…………」

「どう…ですか？」

こ、これは……。

「焼き加減や塩の加減は多分良いと思います……でも、これ、何か変わったもの入ってませんか？」

「あ、隠し味に硫酸を少々」

「……瑞希ちゃん、硫酸の危険さは科学でやりましたよね？」

「でも、少し酸っぱいほうが良いかなって…」

「えと、酸味を付けるには硫酸や塩酸じゃなくてお酢です…。硫酸や塩酸は危険すぎます。とりあえず食料に混ぜてはいけません」

「……というか、奈乃香は硫酸入りの卵焼きを食べて平気なのかの？」

「秀吉、奈乃香は料理のプロだからきっと食事にはギャグ補正がかかったんだよ」

「明くん……意味が分からないです」

「えと、私のお弁当……どうしましょう……」

「……うーん、とりあえずこの中で科学薬品を入れてない物はありますか？」

「えっと…確かおにぎりとお野菜とウインナーは大丈夫です」

「じゃあそれを食べると良いですね。明くん、頑張って下さい」

「えっ!?」

とそこへ…

「おう、待たせたな……へ——なかなか旨そうだじゃないか!どれどれ?」

「あ、雄二君!それは——」

「(パクっ)」

雄二君が来て私のと間違えて瑞希ちゃんのお弁当のおかず(薬品入り)を食べてしまいました…。

「(バタン……ガタガタ…)」

「……姫路さん、とりあえずこれからは科学薬品は止めようか」

「……はい」

「雄二君、しっかり！　えと、お茶を！」

「（ゴクッゴクッ……）コホッ、……い、一体何が…？」

「えっと、実はカクカクシカジカで…」

「何ッ！？　マルマルウマウマだったのか……！」

「とりあえず雄二君は足がまだふらついてますね…仕方ありません。ヨイショ…どうぞ」

私は正座に座り直して膝をパンパンと叩きながら雄二君に言いました。

「……何だ？」

「膝枕ですよ？」

「なっ！？　んな恥ずかしいこと――」「ダメです。無理はさせられま

せんから」（ポフッ）……／／／

「雄二殺す……」

「殺したいほど妬ましい……」

「わ、ワシも……（パクっ……バタン）」

「えっ！？秀吉くん！？」

秀吉くんが自ら瑞希ちゃんのおかず（薬品入り）を食べて倒れました…。

「雄二君、秀吉くんと半分ずつにするので少し片方に寄って貰って良いですか？」

「あ、あぁ…／／／」

「秀吉くんも、こっちに」

「う、うむ…（ポフッ）気持ち良いのじゃ…」

「……ズルイ」

「そうだよ二人とも！　僕だって奈乃香に膝枕してもらいたいのに！」

「えと、これ以上は場所が無いので無理です……」

「くそっ！　雄二は後で絶対殺してやる！！」

「明くん、ダメですよ？　雄二君が可哀想です」

「キィーッ！！　ＦＦＦ団に言いつけてやる！！」

「なっ！？　やめろっ！！」

「…………異端者には死の鉄槌を」

「何故秀吉にはないんだ！！」

「女の子同士なら別に良いじゃないか！！」

「……（コクコク）」

「……ワシは男じゃ」

「……ねぇ、どうしてこんなことになってるわけ？」

「あ、美波ちゃん！お疲れです！」

「あ、うん。っていうか何でアンタ木下と坂本を膝枕してるの？」

「まぁ色々ありまして……」

「ふぅん……まぁいいけど」

「秀吉くんも雄二君も、こうして見ると可愛いですよ♪」

「「……／／／」」

「もう良いよ……とりあえず僕はお弁当を食べるよ……」

そう言って明くんは瑞希ちゃんのお弁当を全て一気に口にかきいれました。
もちろん薬品入りのも含まれてますので……

「……ぶはぁっ！！！」

「よ、吉井君！しっかりしてください！」

「吉井！？何があったのよ！？」

まぁ、私が食べても大丈夫な物を瑞希ちゃんに聞いたのを既に忘れて食べた明くんが馬鹿なだけですけど。

その後明くん以外は私のお弁当でお昼を済ませました。明くんは学校が終わるまで意識が朦朧としてました……。

第六問（後書き）

奈乃香の優しさとお腹の強さが見られた回でした（笑）

秀吉と雄二が奈乃香に好意を持ってるのが明らかになった回でもありますね（特に秀吉）。

……まさか秀吉が膝枕の為だけに自ら瑞希の殺人料理を食べるとは……（笑）

今後瑞希の殺人料理を上達させるか、それとも科学薬品以外の物が色々混ざるようなヤバイやつにするのか迷ってます。とりあえず希望があれば教えてください…。

感想、アドバイスと、前回に引き続き、奈乃香のフラグ相手の候補お待ちしてます！

第七問（前書き）

今回の話は短めです。

とりあえず投稿です…。

第七問

「う、ううん……」

「あ、明くん、気がつきましたか？」

今は放課後になったばかりで、他のクラスはまだショートホームルーム中だと思われます。

「え？僕になんかあったの」

「お主は姫路のお弁当を一気食いして気絶したのじゃ」

「姫路さんのお弁当…？あっ！！」

「思い出したようじゃな」

ちなみに瑞希ちゃんのお弁当とは皆さんご存知のあの殺人料理です。

「吉井君、ごめんなさい…」

「ひ、姫路さん、気にしないで！」

「は、はい…これからは科学薬品は止めます…」

「（ほっ……）」

「おい明久！起きたのならBクラスに宣戦布告してこい」

「い、イヤだよ！もう騙されないぞ！今度は雄二が行けば良いじゃないか！！」

「……わかった。ならじゃんけんで決めよう。ただしただのじゃんけんじゃぁ面白くねぇから心理戦といこうか」

「わかった。なら僕はグーをだすよ」

「そうか。なら俺はお前がグーを出さなかったらぶち殺す」

「えっ！？ちょっと待って「じゃんけん……」わぁっ！！」

「ポン」

明くん↓グー

雄二君↓パー

「……さぁ逝ってこい」

「嫌だぁ！！行きたくないぃ！」

「大丈夫だ明久、Ｂクラスには美少年好きが多いらしい」

「そうなの？なら大丈夫だね」

「あー…でもお前不細工だもんな…」

「失礼な！３６５度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「……５度多いぞ」

「実質5度じゃな……」

「明くんの言う通り、確かに5度微少年ですね！」

「ちくしょう！三人なんて嫌いだ！」

明くんは走って行きました…。

「あんなこと言いながらも結局は生け贄になりにいくんですね…」

「明久、逝ってらっしゃいなのじゃ…」

…………………………

「言い訳を聞こうか？」

ボロボロの明くんが帰って来ました。

「予想通りだ」

「ですね」

「じゃな」

「くきぃ――っ！！殺す！」

「落ち着け」

「ぐふぁっ！！」

明くんの横腹を雄二君が殴り付けました…。

「さてと俺は先に帰るぞ。明日も午前中はテストなんだから寝すぎるなよ」

「ワシらも帰るかの」

「そうね。じゃあね、吉井」

「…………また明日」

「誰も心配してくれないなんてね……あれ、あそこに見えるのは姫路さん……でも様子がおかしいな。どうしたんだろう？かなり挙動不審だ。……あぁ、昨日の手紙をどこに置こうか考えてるのかな？邪魔しちゃいけないな……よいしょ……」

「明くん、大丈夫ですか？」

「な、奈乃香！？皆と帰ったんじゃなかったの？」

「えと、なんとなく明くんが心配になったので一緒に帰ろうかなって」

「奈乃香……」

「あと、明くんの成績があまりにも悪いので今日は私が明くん家に泊まって勉強を教えることにしたので♪」

「と、泊まり！？」

「ちゃんとパジャマもありますから♪」

そう言って私はカバンからパジャマをちらつかせます。

「分かった。せっかくだしお願いするよ」

「はい♪晩御飯も作ろうと思ってますけど、家に食材は――「無いです」……ですよね。じゃあ帰りに買い物付き合ってください」

「うん、分かったよ」

「今日は何を作りましょうかね？」

「とりあえずお腹いっぱい奈乃香のご飯が食べたいよ！」

「ふふっ、了解です♪」

…………………………………………

夕食後……

「ふぅ～……ごちそうさま。流石奈乃香だね。凄く美味しかったよ」

「えへへ……ありがとうです♪……よし、じゃあ勉強しますよ？」

「え？…………あ、うん、そ、そうだね！」

「…………忘れてましたね？」

「……すみません」

「まぁいいですけど。じゃあ先ずは明くんが一番出来そうな世界史から……」

その日、改めて私は明くんが馬鹿だったということを思い知らされました…。

「明くん、三國志以外のところも覚えましょうね…？」

「……頑張ります」

第七問（後書き）

明久はＢクラス戦で点数がどれくらいまでマシになってるのでしょうか…？

がんばれ奈乃香…。

第八問（前書き）

お待たせしました。

第八問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

明くんとの勉強の翌日。
今日はいよいよBクラスに挑みます。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入するが、殺る気は充分か？」

……雄二くん、殺る気は出したらダメです。出すのはやる気にしてください。

『おぉ――――――――っ！！』

……皆さんもですか…？

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが鍵になる。渡り廊下では絶対に負けるわけにはいかない。そこで、姫路や奈乃香に前線部隊の指揮をとってもらう」

「が、がんばります！」

「任せてください！」

「よし、野郎共！きっちり死んでこい！」

『うぉぉぉぉ――っ！！』

雄二くんの言葉に皆さんが叫びました。

その時、

『キーンコーンカーンコーン……』

チャイムが鳴り響きました。これが戦争開始の合図となります。

「よし、行ってこい！！」

雄二くんの号令で前線部隊が教室を飛び出して行きました。

「瑞希ちゃん、私たちも行きましょう！」

「はい！」

私と瑞希ちゃんも後に続きます。

…………………………………

「いたぞ！Ｂクラスだ！」

「高橋先生を連れてるぞ！！」

高橋先生は学年主任で、西村先生と同じく全教科での召喚フィールドを張ることができます。

そして今のフィールドは総合科目です。

こちらは相手に文系が多いため、理系の先生を連れてますが、桁が違いすぎてどんどんやられていいます。

「お、遅れ…まし…た…。ごめ…んな、さい…はぁ、はぁ…」

「来たぞ！！姫路瑞希だ！」

瑞希ちゃん、走って来たせいで息が上がってます。

「Bクラス岩下です。Fクラス姫路さんに数学勝負を申し込みます！！」

「律子っ私も手伝う！」

Fクラス姫路瑞希ｖｓBクラス×２

数学４１２点ｖｓ１８９点＆１５１点

「じゃ、いきますね」

そう言って瑞希ちゃんは召喚獣に片腕をかざさせました。その腕には腕輪が着いていて……

『キュボッ！！』

「きゃあああっ！！」

「り、律子っ！！」

相手の子の召喚獣の片方を一撃で粉砕。さらに、

「ご、ごめんなさいっ！！」

『ズバッ！！』

召喚獣が持っていた大剣でもう一人の召喚獣を真っ二つにしました。

Ｂクラスは全部で十人。残りは八人ですか。なら…、

「高橋先生！Ｆクラス坂上奈乃香がＢクラス八人に総合科目勝負を申し込みます！」

「承認します！」

「「「「「「「「えっ！？」」」」」」」」

指名された相手は思いがけないことに驚いているみたいです。

「坂上奈乃香だって！？」

「あの事実上、学年トップの…！！」

「ヤバイよ！」

「いや、この人数差なら…」

「よ、よし、いくぞ！！」

そして点数が表示されます…。

Ｆクラス坂上奈乃香ｖｓＢクラス八人

総合科目５９８２点ｖｓ平均１８００点×８

「行きます！」

「う、うぉぉぉっ！！」

「ええいっ！！」

敵が先ず二人突っ込んで来て、私の召喚獣に斬りかかります。

『ブンッ！！』

「おっとっと…、今度はこちらの番ですっ！！えいっ！！」

敵の攻撃をかわした私の召喚獣が、青龍偃月刀で一閃しました。

『ブゥンっ！！』

敵の召喚獣のうち、四体に攻撃が当たり、そのうち二体はかなり点数を削り、一体は戦死。もう一体はかすっただけでしたが、点数の差もあり、そこそこの点数を削れました。

「戦死者は補習ゥ――っ！！」

「い、嫌だァァ――っ！！」

召喚獣が戦死した、Ｂクラスの男の子が西村先生に補習室へ連行されました。

「くそ……！　こうなったら、一気にかかれっ！！」

部隊の指揮をとっているっぽい男の子が号令をあげ、私の召喚獣に一斉に襲い掛かって来ました。

「三國志の英雄を侮ってはいけませんよっ！！」

先ず、敵の攻撃をしゃがんでかわし、後ろ蹴りで一体を弾き飛ばして戦死。

続いて青龍偃月刀を地面に刺して、それを軸に回転しながらの蹴りで敵の召喚獣二体の武器を蹴飛ばして青龍偃月刀で突きを喰らわせて二体戦死。

そこに後ろから斬りかかってきた召喚獣の攻撃を白刃取りで受け止めて（笑）武器を奪って手刀を三発で戦死。

残った三人を全力の一撃で薙ぎ払って戦死。

「……ふぅ」

「「「「「「「な、なにぃ――!?」」」」」」」

「戦死者は補修だっ!!」

「「ぎゃあーっ!!」」

「地獄の補習は嫌だァ――っ!!」

「「「助けてくれぇ――っ!!」」」

「止めてぇ――っ!!」

「諦めろ!!補習が終わった頃には趣味は勉強、尊敬する人物は二宮金次郎という、理想な人間にしてやる!」

「「「「「「そ、それが一番いやだぁ――っ!!」」」」」」

「み、皆さん、人間、諦めも肝心らしいです…」

「「「「いや、アンタ（キミ）のせいだろ（でしょ）！！」」」」

お、怒られちゃいました…。

「ご、ごめんなさい…（うるうる…）」

『ズキューン（×7）』

「「「「いや、気にしないでくれ（ちょうだい）！！」」」」

「…ふぇ？は、はい…」

何故か皆さん鼻を押さえてます…。

西村先生に引きずられながら。

「と、とりあえず奈乃香と姫路さんは一度下がって」

「あ、明くん。分かりました」「あ、はい」

私と瑞希ちゃんが同時に返事をしました。

「中堅部隊と入れ替わりつつ後退。戦死だけはするな！」

「明久、奈乃香。ワシらは一旦教室に戻るぞ」

「え？なんで？」

「何かあったんですか？」

「Ｂクラスの代表じゃが…『あの』根本らしいのじゃ」

「えっ…？」

「根本って、『あの』根本恭二？」

「うむ」

私、あの人嫌いです…。

カンニングばかりするし、球技大会では、対戦相手に一服盛ったらしいです。
周りを蹴落として自分だけが得をすれば良いって考え方みたいですし…。
「なるほど…。戻ったほうが良さそうだね…」
「雄二くんに何かあるとは思えませんけど…、」
「念のため…という訳じゃな」
…………………………………
「嘘……」
私たちが教室に帰ると、Ｆクラスは酷い有り様でした…。
卓袱台はズタズタに切り裂かれて、シャープペンシルや鉛筆は折られていて、消しゴムは粉々にされていました…。
しかも荷物を荒らした形跡まで…。
「まさか、こうくるとはのぅ…」

「卑怯だね…。これじゃ補給がままならないよ」

「まぁあまり気にするな。修復に時間はかかるが作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど…。どうしてこんなになるまで気が付かなかったの？」

「協定を結びたいと申し出があってな、調印のために教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。今日の４時までにけりがつかなかった場合は明日の午前９時に持ち越し。それまでは試召戦争に関わる一切の行為を禁ずる…ってな」

「それ、承諾したの？」

「ああ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方が有利じゃない？」

「姫路と奈乃香以外は…な」

「あ……！」

「まぁそういうこった。アイツらを教室に押し込んだら今日は終了だろう。そうなると、作戦の本番の明日には姫路と奈乃香の力が必要なんだ」

「なるほどね…。ところで奈乃香、さっきから何で黙ってるの？」

「……根本くん…許せないです…」

「ああ…。アイツには絶対になにかしら仕返ししてやるさ」

「そうだね……！」

「おい、大変だ！」

その時、須川くんが教室に駆け込んで来ました。

「どうした？」

「…島田が人質に取られた……！」

「何だって！」

「あ、明くん！」

「うん、急ごう！」

私と明くん、須川くんは急いで美波ちゃんのところへ向かいます。

…………………………

「島田さん！」

「美波ちゃん！」

「吉井、奈乃香！」

私たちが駆けつけると、戦死直前のＢクラスの二人に取り押さえられた、同じく戦死直前の美波ちゃんがいました。

「う、動くなぁ！」

「動けばコイツが戦死するぞぉ！」

「た、助けて吉井、奈乃香ぁ！」

くっ……美波ちゃんが人質だと動けない……！

「全員突撃ぃ――――っ！！」

「えぇ——！？」

まさかの明くんの号令です。

「よ、吉井隊長、いいのか？」

「そうですよ明くん！美波ちゃんが人質なんですよ！？」

「いや、きっとあれは偽物だ！」

「ちょ、違うわよ！私は吉井が怪我したって聞いて……」

「全員突撃だぁ——っ！！」

「な、何でそうなるのよぉ——！？」

「ぐわぁ——っ！！」

「くそぉ——っ！！」

Ｂクラスの二人は、躊躇うことなく突撃したＦクラスの面子によってやられました。

「戦死者は補習ゥ――――っ！！」

またしても西村先生です。
お忙しい中ご苦労様です…。

「吉井…酷い…」

「まだ島田さんのフリをするか！皆気をつけろ！変装をといて襲い掛かって来るぞ！」

「私、吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなったって聞いたから駆けつけたのにぃ――――っ！！」

「包囲中止！これ、本物の島田さんだ！」

「…………」

「あー、あのね、島田さん」

「…………」

「実は僕……最初から本物だって気づいてたよ？」

『ドガッ、スカッ、バキィッ！！』

……明くん、サイテーです。美波ちゃんにボコボコにされてますけど、自業自得ですよね…？

……………………………………

「う、ううん……ここは…？」

「あ、気がつきましたか、吉井君？心配しましたよ？まるで誰かに蹴られて散々殴られた後に廊下にうち捨てられたように倒れてたらしいんですから」

「そ、そうだったの…？」

「はい。奈乃香ちゃんが運んできてくれましたけど、戦争だからって実際に怪我をする必要はないんですよ？」

「…ちょっと色々あってね。それより戦争は？」

「今は協定通り休戦中じゃ」

「戦況も計画通りだ。……ん？ムッツリーニ、何か変わったことはあったか？」

「…………Cクラスに不審な動きが」

「相手はAクラスか？……いや、漁夫の利を狙うつもりか……」

「雄二、どうするの？」

「Cクラスと協定でも結ぶか」

「じゃあ今から行きますか？」

「そうだな。秀吉は念のためここに残ってくれ」

「あ、吉井！」

「え？あ、島田さんに須川くん」

「どこか行くの？」

「ちょっとCクラスに協定を結びにね。二人も付いてきてよ」

「別にいいけど」

「俺も構わんが」

結局、雄二くんに明くん、美波ちゃんと瑞希ちゃん、須川くんと私で行くことになりました。

…………………………………

『ガラガラ……』

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど何か用？」

出てきたのは小山友香さんです。……あれ？確か小山さんって……

「（雄二くん！）」

「（ん？何だ、奈乃香？）」

「（小山さんは確か、根本くんの彼女です！それに、根本くんを含めたBクラスの人が何人かいます）」

「（なに！？ホントか？）」

「（はい。ちょっと私が誘き出してみます）」

「（頼む）」

「あ、あの、小山さ……きゃっ！！」

「え？おっとっと、大丈夫？えっと、坂上さん？」

小山さんに話しかけようと前に出たときにつまづいちゃいました。
でも、小山さんが受け止めてくれました。

「はぅ……ごめんなさい……」

「い、良いのよ……。怪我は無い？（か、可愛いわ…）／／／」

「はい！ありがとうございます。小山さんって、優しいんですね（ニコッ）」

「そ、そんなことないわ…（だめ…顔の火照りとドキドキが止まらないわ…）／／／」

「あ、あの…」

「な、なにかしら？」

「小山さんって、美人ですよね…？」

「なっ！？いきなりなに！？／／／」

「いえ…その、確か小山さんって根本くんとお付き合いしてるんですよね…？」

「ま、まぁね…」

「その、小山さんは美人だし優しいのに、どうしてあの人と付き合ってるのかなって…。正直釣り合わないと言うか…」

根本くんがイライラしてるのが目に見えて分かりました。

「え？あ、それは…確かにそうね」

あれ？小山さん、思ったのと違う反応…。

「小山さんには、もっと釣り合う人とお付き合いして、幸せになってほしいな~なんて…」

と、その時、

「おい、人を侮辱するのも大概にしろよ！」

根本くんが痺れを切らして怒ってきました。

でも…、

「おい、根本恭二、お前、何でCクラスにいるんだ？」

こうなれば雄二くんに勝てるわけがありません。

「そ、それは…か、彼女に会いに来るのは駄目なのかよ！？」

「ほう…。ご丁寧に教師や護衛も連れて…か？先生、Bクラスは協定違反なんじゃないか？」

「えっ？あ、た、確かに…根本くん、これは…」

「く、くそっ！！お前ら、ここは退くぞ！」

Bクラスの人が皆Cクラスから出ていきました。

「……ねぇ」

「え？」

その時、小山さんに声をかけられました。

「その、さっきの…話だけどさ…、私…もう好きになっちゃったかも…」

「え？好きな人が出来たんですか？」

「……うん。だから、試召戦争が一段落したら、告白しようと思うわ／／／」

「そうですか！がんばってくださいね！」

「うん！だから待っててね！／／／」

「？？…わ、分かりました！」

何で顔を赤らめて私に向かって熱い視線を送ってくるんでしょう…？

でも、小山さんは女の子の私から見ても美人ですし…。告白される人は羨ましいですね…。

……はっ！いや、別に私はそっちの気は無いですよ！！

…………多分。

「ねぇ奈乃香、何で一人で悶えてるの？」

「ふぁ！？い、いえ、何も……！」

「そう？ならいいけど」

明くんが鈍くて助かりました。これが雄二くんなら…。と、雄二く

んの方を見てみると、

「……ちっ、またライバルが……！」

ら、ライバルですか！？　でも、Ｃクラスとは戦争しなくて良さそうだったですけど……！？

雄二くん、何でそんなに私を見てくるんですか！？

「…………とりあえず、Ｆクラスに帰るか」

「は、はい…」

「そうだね」

「そうですね」

「早く帰りましょ」

「だな」

こうして今日の試召戦争は終わりました。

P．S．この日以降、小山さんが私に凄く頻繁に話しかけてくれるようになりました。嬉しいです♪

第八問（後書き）

Ｃクラスに秀吉が行くことなく試召戦争を回避出来ました（笑）

そして小山さん、惚れっぽいな…（爆）

第九問（前書き）

お待たせしました！
更新です♪

第九問

「壁を上手く使うんじゃ！　これ以上戦線を広げるでない！」

Ｃクラスに行った翌日の試召戦争はＢクラスに少し圧されぎみです。

「吉井隊長、左側出入口の教科が古典に変わったぞ！」

「古典……竹中先生か。姫路さん、頼める？」

明くんは瑞希ちゃんに言いました。

「えっ！？あ……」

何でしょうか？
ものすごく歯切れの悪い返事…。

「明くん、ここは私に任せて下さい」

「奈乃香？でも奈乃香は確か古典はあまり得意じゃなかったよね…？」

「それは大丈夫です。考えがありますから」

じっと明くんの目を見て言いました。

「……分かったよ。でも、無茶はしないでよ？」

「大丈夫です。一瞬で何とかしますから♪」

私は竹中先生の方にトテテと走って行って——

「センセ、ズラがずれてますよ？（ボソッ）」

と、竹中先生にしか聞こえないように言いました。

「っ！？し、少々席を外しますっ！！」

竹中先生は頭をおさえながら走って行きました。

「明くん、今のうちに態勢を立て直しましょう♪」

「わ、分かったよ…」

これで少しはマシになるでしょう…。

「報告！右側出入口の教科が現国になった！援軍を頼む！！」

「わ、私が行きますっ！！あっ……」

一瞬自分から名乗り出た瑞希ちゃんですがBクラス内の何かを見て引き下がりました。

「一体何が……？」

私はBクラス内に視線を向けました。でも特に変わったことは――

あれ？

《ヒラヒラ……》

根本くんが持ってるあの便箋…。まさかあれが？

「あ、明く――」

「根本くん、面白いことをしてくれるじゃないか……！」

私は明くんに話しかけようとしましたが、明くんが何か凄く怒っているのが分かり、声をかけ損ねました。

「……奈乃香、ここは任せたよ」

「明くん、何か有るんですね？」

「うん」

明くんは深く頷きました。

「分かりました。瑞希ちゃんを傷つけているのが根本くんと分かった以上、私も許しません。誰か！！」

「はい？」

返事をしたのは須川くんです。

「Ｆクラスの私の荷物の横にあると思われる長い筒状の袋を急いで取ってきて下さい」

「分かった！」

須川くんは走ってＦクラスに戻って行きます。

「明くん、戻るときに高橋先生を呼んでおいて下さい」

「分かったよ！ありがとう」

明くんも走って行きました。

「さてと…、今日はまだ戦ってませんし、点数は万全ですね。敵は近衛部隊と根本くんしか残ってない。私一人でやりますか」

「坂上さん！取ってきたぞ！」

「須川くん、ありがとう。後は全部私が」

「行けるのか？」

「うん。ちょうど高橋先生も来たようですし。皆の指揮を頼みます」

「了解だ。戦死はするなよ？」

「分かってますよ。じゃ、高橋先生！Ｆクラス坂上奈乃香が総合科目勝負を申し込みます！」

袋から青龍偃月刀のレプリカを取り出し、袋を投げました。

「承認しましょう。ですがその偃月刀は…？」

「召喚獣と同じ動きをすることで集中力を高めるためです。ちゃんと扱えますし、西村先生に相談してますから大丈夫です」

「……分かりました」

高橋先生は総合科目の召喚フィールドを発現しました。

「試験召喚獣――、サモンっ！！」

「何ッ！？坂上奈乃香だとっ！？ちっ…アイツも脅しておくべきだったたか。お前たち、向かい討て！」

根本くんが偉そうに指示を出します。

「Bクラス近衛部隊、全員で受けますっ！！サモンっ！！」

Fクラス坂上奈乃香VSBクラス近衛部隊8人

総合科目
6284点VS1650～2300点（8人）

「ろ、6000超えだとっ！？バカなっ！！」

「スゥッ……はぁぁぁ」

青龍偃月刀をゆっくりと構える私と私の召喚獣。

「いざ、参らんっ！！」

《ダッ……！》

「くっ！数で当たるぞ！」

「てやぁっ！！」

私と召喚獣は右足の爪先を軸にぐるりと一回転し、相手の後ろに回り込みます。

「腕輪発動っ！！」

《キィインっ！！》

召喚獣の腕輪が輝き、その輝きが私の召喚獣に吸い込まれて召喚獣が金色に変わります。

「な、なんだこれはっ！？」

近衛部隊の人たちに動揺が走ります。

「ハァ――っ！！」

《ブンブンブンっ！！》

近衛部隊の人数を三人削りました。

「な、なんだこの動きはっ！？まるで吉井明久の召喚獣じゃないかっ！！」

「その通りですよ。明くんの召喚獣のコントロールは学年一。点数差が十倍あったとしても勝ち目があるくらいです。そして私の召喚獣の腕輪の効果は『観察処分者並のコントロールを得る』です」

「そ、それって……！」

「ええ。私の召喚獣の得点でコントロールが最強クラス。つまり相手の攻撃は当たらずこちらの攻撃は常にクリティカルヒットです」

「そんなの……勝てるわけが……」

近衛部隊の人たちは顔を青くしています。

「お、おいっ！　お前ら、早くそいつを何とかしろ！」

根本くんが叫びます。

「まぁ、確かにBクラス上位の近衛部隊多数を相手にするには私の体力が持ちませんね。でも……」

《ドガァッ！！！》

「これで詰みです」

壁を破壊して明くんが入って来ました。

「奈乃香、お疲れ！　田中先生、Fクラス吉井がBクラス根本に世界史勝負を申し込みます！」

「はっ！吉井ごときがＢクラス代表の俺に勝てるか！サモンっ！！」

Ｆクラス吉井ＶＳＢクラス代表根本

世界史
２６１点ＶＳ１９６点

「ば、バカなっ！！何故吉井がこんな点数を！？」

「僕には最高の家庭教師がいるんだよ！くらえっ！！」

《グサッ！》

「Ｂクラス代表根本恭二……戦死！勝者Ｆクラス！」

第九問（後書き）

明久の家庭教師は勿論奈乃香ちゃんです♪

奈乃香の偃月刀は根本との交渉時に役に立つかも（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0391u/

バカと美少女と召喚獣!?

2011年8月25日08時26分発行